フィジー系フィジー人とインド系フィジー人を対象にした幸福感の要因の調査

近藤 巧一

現在、日本では雇用の非正規化や若者の就職難が進行するなど、様々な理由で人々の将来に対する不安が高まっている。2017 年の Gallup International 社と WIN 社の共同行った純粋幸福度調査では 55 カ国中フィジー共和国は１位、日本は 19 位であり、2017 年の IMF 統計に基づく一人当たりの購買力平価 GDP の値では 193 カ国中、フィジー共和国は 94 位、日本は 32 位という結果であった。この比較により、日本は経済的に豊かであるのにもかかわらず幸福度が低いと考えられる。

Pratt ら(2016 年)はフィジー共和国において、観光とあまり関係のない自給自足の村の方が幸福であることを明らかにし、自給自足の村の幸福の要因は親族関係や伝統を重んじ金銭や物質的な豊かさという概念が少ないことによる社会的に豊かさであると考察にて示唆したが、調査結果において幸福感の要因について明らかにしていない。

そこで、本研究では人口の①約 57%を占めるフィジー系フィジー人 3 名(ローマ・カトリック教会 2 名、セブンスデー・アドベンチスト教会１名)、②約 38%を占めるインド系フィジー人 2 名(ヒンドゥー教)に半構造化インタビューを 2 回ずつ行い、フィジー共和国という金銭的に日本と比べ豊かではない国の国民が、日本人よりも幸福を感じる要因を探索し、明らかにすることを目的として調査を行った。主な調査項目は幸福感の主な要因や、宗教やフィジー共和国特有の習慣等と幸福感の関係についてである。

調査の結果、本研究においては幸福感の主な要因は①と②に当てはまる要因として家族や友人などの人間関係を重視する価値観によるものとわかった。①においては金銭や物という魂を持たないものを尊重せず、魂を持つようなものとの関わりを尊重していて、家族やそれに近しい親類、そして友人を持つことが自身の財産であるという価値観が見られた。そして①においてのみ、他者との交流を通じた喜びを重視することから、現在の生活の充実に注目するようなコンサマトリーな志向が見られ、仕事など未来のために行う行為の中でも、現在の私生活を充実させるような価値観をもっていて、将来に関する不安を感じていないことが、幸福感の要因であることがわかった。

両者は人間関係を重視するが、①は自身の思想や信条との関わりの表れとして習慣について語る傾向があったが、②は①と比べ、語りに内省が少なく、生活習慣として淡々と語る傾向があった。日本とフィジー共和国を比較すると、金銭や物質的豊かさの価値観に代る価値観としての「家族こそが財産」という考え方と、インストゥルメンタルな状態である仕事中でも、時間を充実させるために使うというコンサマトリーな志向が、現在の日本に採り入れ得る考え方であると考察できる。

（指導教員　後藤 嘉宏）